

●発行日：2016年4月16日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

||||| 発行：教材出版 学林舎



学習教育の行き先
求められる算数・数学力

＜求められる「思考力・表現力」＞

近年の学力に関する調査において、日本の子どもたちに「習得した知識・技能を使って考える力や考えたことを表現する力が十分ではない。」「見つけ出した情報相互の関連性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結びつけたりすることが苦手である。」といった課題が見られました。この調査結果を受け、政府は「思考力・判断力・表現力の育成に努める」とし、現行学習指導要領内では、学習評価の観点として新たに「思考・判断・表現」を示し、また、それらの力を育むために、各教科の特質に応じた言語活動の充実を求めています。

知識や技能を得ることだけではなく、それらを活用し問題を解決する力、つまり、問題に対し「自ら考える力」「適切かどうかを判断する力」「自らの考えを表現する力」を育むことを重要視しているといえます。

＜算数・数学における「思考力・表現力」とは＞

前述した「思考・判断・表現」の観点は、算数では「数学的な考え方」、数学では「数学的な見方や考え方」にあたります。例えば、中学数学の数学的な見方や考え方の趣旨は、「事象を数学的にとらえて論理的に考察し表現したり、その過程を振り返って考えを深めたりするなど、数学的な見方や考え方を身に付けている。」とされており、問題解決の結果だけではなく、結果を出した過程を含めて評価することが重要視されています。現行学習指導要領でも、言葉だけではなく、数学的な

表現、すなわち、数、式、図、表、グラフなどを用いて、論理的に考察し表現したり、その過程を振り返って考えを深めたりする学習活動の充実が求められています。

＜「思考力・表現力」が必要な問題とは＞

「思考力・表現力」が重要視されるようになり、算数・数学の出題内容にどのような変化があるか、公立高校の入試問題を例にとりて考えてみます。

まず、日常の場面からの出題が目立つようになりま
した。例えば、2つの電化製品の燃費を比較する問題や、
出し物の発表時間からイベントのスケジュールを考
える問題、アンケートの集計結果やゲームの得点を使っ
た問題などが出題されています。また、設定が複雑で、
設問文が長い問題も増加傾向にあり、会話文から情報
を読み取らせる問題や、複数の表を見比べる問題、複
雑なルールを定めたゲームの結果を考える問題などが
出題されています。これらの問題では、「事象を数学
的にとらえる力」や「問題の解決のために論理的に考
察する力」が必要になります。

その他にも、問題の答えだけではなく、解く過程や自分の考えを記述させる問題も見られます。過程を記述させる問題は、これまでも一部の入試問題では出題されていましたが、近年では、連立方程式の解き方や立体の体積や辺の長さの求め方、関数の直線の式の求め方など、記述させる内容が多岐にわたっており、記述内容についても、分量が多く、自由度の高い問題が増えている傾向にあります。また、自分の考えを書かせる問題では、資料の活用の単元からの出題が多くなっています。例えば、2015年度の岩手県入試では、2人の陸上部員の記録をまとめた度数分布表を見て、どちらの部員を選手として選ぶか、理由も合わせて記述するという出題がありました。この問題では、どちらの選手を選んだとしても、正当な理由が書けていれば

正答となります。これらの問題では、「問題解決のために論理的に考察する力」はもちろん、「考えた過程を表現する力」が必要になります。このような出題の傾向は、今後も続いていくと予想されます。

<求められる「算数・数学力」>

「数学は社会に出てから必要ではないのに、なぜ学校で勉強するのか。」というのは、多くの学生が抱く疑問でしょうし、確かに、実生活で「三角形の合同を証明せよ。」と言われる機会はありません。しかし、数学を通して育んだ「思考力・表現力」を使う機会は決して少なくないように思います。今、求められる算数・数学力とは、そういった「算数・数学で育んだ力を実生活に応用する力」のことなのかもしれません。

(文 / 学林舎編集部)

教育現場の行き先

学童保育がもたらすもの

学童保育とは、就労しているなどの理由で保護者が家にいない小学生を対象に保育をする制度のことで、「放課後児童クラブ」と呼ばれることもあります。学校で授業がある日の放課後の保育だけでなく、夏休みなどの長期休暇には、一日を通して（8時間以上）保育が行われます。保育は、小学校敷地内に設置された専用施設や小学校の余裕教室、児童館などで行われ、学童保育施設は児童に遊びや生活の場を提供する安全・安心な居場所となります。費用は施設によって異なりますが、一般に月額5千円～1万円くらいの施設が多いようです。

<学童保育の現状>

現在、学童保育の施設数は全国で22,608カ所あり、学童保育を利用している児童数は1,024,635人（2015年5月1日現在、厚生労働省発表資料）です。2005～2015年の10年間では、施設数は約1.6倍、児童数は約1.5倍に増加しています。厚生労働省によると、2015年に利用を申し込んだものの学童保育に預けることができない待機児童数は全国で16,941人とされ

ており、前年から6,996人増加しています。ただし、保育時間が保育所より短いなどの面で条件が合わず、母親が仕事をやめてしまうケースなども含めると、潜在的な待機児童数は40万人以上と推測されています。また、これまでは原則として小学3年生までの児童が対象でしたが、法律の改正によって、2015年4月からは小学6年生までの児童に拡大されました。しかし、これは義務ではないため、高学年の利用者を受け入れていない施設も多くあり、高学年も含めると潜在的な待機児童数はさらに多くなるといえます。

学童保育の保育時間は施設によって異なりますが、17:00～18:00の間に閉所する施設は全体の27.9%、18:01～18:30の間に閉所する施設は全体の23.4%となり、18:30までに閉所する施設は全体の半数を占めます。一般に19:00頃まで子どもを預けられる保育所と比べると、学童保育は早い時間に閉所する施設が多いといえ、この問題は、小学校の入学を機に母親の就業率が低下する「小1の壁」の一因となっています。

これらの現状から、学童保育の施設数の増加や、保育時間の拡大が強く望まれているといえます。

<学童保育と新規ビジネス>

最近では、民間企業による学童保育の機能をもった新規ビジネスが少しずつ増えてきています。22:00までの延長保育や夕食の提供、学校の校門から施設までと施設から自宅への送迎サービスなどは、公立の施設では実現が難しいサービスですが、保護者からは強いニーズがあります。

また、公立の学童保育の場合、宿題への指導は行われないため、宿題の指導を含めた学習指導に強いニーズをもつ保護者もいます。塾などの教育関連会社が運営する学童保育の場合、保育サービスだけでなく、宿題の指導や授業を行うなど、教育サービスを受けることができます。また、スポーツクラブが運営する施設には、学習指導のほかに水泳教室や体操教室、ダンス教室などの習い事を受けることができる施設もあるようです。さらに、外国人スタッフを配置し、英会話教育に力を入れている施設もあるようです。これらの施

設利用料は施設や利用時間によって異なりますが、通常月額4～6万円程度、夏休みとなる8月で5～10万円程度の施設が多く、公立の料金に比べてかなり高くなっています。しかし、働いている保護者は、平日に子どもの送迎ができず、休日の時間を使って習い事に通わせることが多いため、このような習い事を売りにした学童保育には、強いニーズがあるといえます。

＜まとめ＞

子どもの人口は減少しているものの、核家族化が進み、共働き世帯が増加傾向にある中で、学童保育に対するニーズは今後ますます強くなると考えられます。また、画一的な保育だけでは不十分と考える保護者も多く、保育に教育を加えた学童保育の新規ビジネスには、将来性があると考えられます。

(文 / 学林舎編集部)

社会現場から 企業による教育支援

学校教育と企業との接点としては、これまで社会科見学での工場見学や、職場体験などが広く行われてきました。近年、ここに「キャリア教育」という要素が加わり、総合的な学習の時間などを活用して企業による出張授業を実施する学校が増加しています。

キャリア教育とは、「一人一人が『生きる力』を身につけ、しっかりとした勤労観・職業観を形成し、将来直面するであろう様々な課題に対応しつつ社会人・職業人として自立していくことができるようにする」ための教育とされています。日本において「キャリア教育」の必要性が提唱され始めるきっかけとなったのは、平成11年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」でした。「キャリア教育の実施に当たっては、各学校ごとに目的を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある」と提言しました。

経済産業省も次世代を担う人材育成に産学協働で取り組むため、キャリア教育を推進しています。産業界

による優れた教育支援活動を奨励・普及・促進することを目的として、企業や経済団体による教育支援の取り組みを公募し、平成22年度より「キャリア教育アワード」として、優秀な事例を表彰しています。

このような国の動きに対し、日本経済団体連合会は企業の教育支援プログラムポータルサイトを開設しました。環境教育、キャリア・職業教育、理科教育（理科実験・科学技術体験）、食育、金融・保険・経済教育、英語教育など12のジャンルに分けてプログラムを紹介しています。

例えば、キッコーマン株式会社は小学生を対象とした出前授業「キッコーマンしょうゆ塾」を実施しています。原材料の大豆・小麦・塩からどのようにしょうゆが作られるのかを教えるだけでなく、しょうゆ粕の処理についての解説を通して環境問題についても考えます。しょうゆについて学びながら、「食べ物」の大切さを考える機会として、総合学習・国語・家庭科・理科・社会などに関連させた授業を提供しています。同社は社会的責任の一環として食育を掲げていますが、子どもたちに商品に触れてもらうことで同社の「ファン」を増やし、好感度の向上にも役立てたい、という狙いもあるようです。

また、積水化学工業株式会社では「理科教室」として、中学校を主な対象に出前授業を行っています。オリジナル実験キットを使って消化酵素のはたらきと吸収のしくみについて確認したり、からだのしくみを利用して検査薬と装置の研究開発を行っていることを説明したりします。また、講師である社員が、研究者としての立場から科学者になるためのアドバイスをすることもあります。生活に身近な科学に触れることによって、理科離れに歯止めをかけ、将来の人材育成につなげたいという考えがあるようです。

企業イメージの向上、次世代育成を通じた社会的責任という目的以外にも、企業にとっては授業を通して社員が自社の社会的役割を再認識し、モチベーションの向上につながる、というメリットもあります。

出前授業を受け入れる学校としては、実際に働く人から話を聞くことによって、児童・生徒たちのキャリア形成のきっかけになる、最新の知識に触れる機会を

得られることや、学校にない機材を使った実験ができることなどの利点があります。

大企業だけでなく、地域の中小企業による協力も広がっています。企業と学校をつなぐコーディネーター役の NPO 団体も増加し、中小企業と学校の懸け橋になっています。教育支援は大企業だけではなく、社会全体での次世代育成の取り組みに成長しつつあります。

(文 / 学林舎編集部)

□学林舎からのお知らせ

○GW期間中の営業に関して

弊社はGW休業を下記の通り実施させていただきます。

皆様にはご不便をお掛けしますが、何卒ご了承の程お願い申し上げます。

GW休業日 4月29日(金)～5月1日(日)

5月3日(火)～5月5日(木)

*5月2日、6日は通常通り営業致します。

○成長するドリルシリーズ(冊子版)に関して

成長するドリルシリーズ「いきる計算」「いきることば」「いきる教養」は切り取り形式、データ形式の2種類を販売しております。これに、冊子版を追加させていただきます、2016年はこの3種類の形式で販売いたします。2017年より冊子版、データ形式の2種類で販売をさせていただきます。

*学林舎WEBショップ

<http://gakurinsha.shop-pro.jp/>

○アメリカの小学校副教材の取扱開始

アメリカの小学校で30年以上副教材として扱われているEvan-Moor社の教材の販売を開始しました。ネイティブが使う教材を使って英語導入(Reading・Thinking・Writing)を推奨します。

*Evan-Moor社の教材を下記WEBサイトにて一部紹介

<http://www.gakurin.co.jp/evanmoor/>

○理科実験器具・工作などのカタログ無料配布

学林舎では、学校で取り扱われている理科実験器具、理科工作などの教材をメーカーと提携して販売しております。

カタログなどの無料配布をおこなっていますので、ご希望の方は学林舎(TEL:06-4962-5876)にお問い合わせください。

○アメリカの教科書・国際バカロレア対応教科書のご購入に関して

学林舎では、アメリカの教科書、国際バカロレア対応の教科書を学校、図書館、塾などに販売しております。ご購入に関しては、校費(公費)などでのご決済も可能です。見積、納品、請求書などの発行にも対応しております。また、販売店(取次店)などを通してご購入いただくことも可能です。

○G T 国語「要約力特化」「文法力特化」に関して

学林舎では、成長する思考力G Tシリーズ国語「要約力特化」「文法力特化」に関して、小学生高学年の夏期の集中講座用の教材として推奨しています。要約力は全8回、文法力は全10回で構成されています。国語力が弱い中学生にもお勧めです。

学林舎WEB展示会で見本をご覧ください。

<http://www.gakurin.co.jp/2006kyouzai/2006koyuzaitop.htm>

クロスロード crossroad

第56回 文／吉田 良治

スポーツ界に今求められること

昨年は新国立競技場問題や、2020年東京五輪・パラリンピックの公式エンブレムの問題など、オリンピック関連でいろいろな問題が噴出しました。そして年末にはプロ野球のスポーツ賭博問題、年明けには元プロ野球選手の清原和博の覚せい剤事件、そして今月はバドミントン日本代表選手による闇カジノ事件と、次から次と様々な問題が浮上しています。

今月2日に朝日新聞でプロ野球のスポーツ賭博問題についての特集記事“野球賭博・金銭問題・薬物… 問われる選手教育 追手門学院大学客員教授・吉田良治氏に聞く”で、私のスポーツ賭博についての考えを取り上げていただきました。

<http://www.asahi.com/articles/DA3S12290560.html>

そしてバドミントン選手による闇カジノ事件を受けて、産経新聞でも特集記事として8日の“安易に一線越える トップアスリート 背景に浮かぶ「負けん気」「金銭感覚のまひ」と、10日の“【激震 五輪直前エース転落（下）】アスリートには何が求められているか 勝負以前の社会性と倫理観”で、私のコメントを取り上げていただきました。

<http://www.sankei.com/affairs/news/160407/a-fr1604070051-n1.html>

<http://www.sankei.com/affairs/news/160410/a-fr1604100015-n1.html>

これらのメディアで取り上げていただいた内容は、アスリートである前に一人の人間として、そしてスポーツ界の問題ではなく、社会の問題であるのとらえるべきということです。賭博など不正行為に手を染めないために何が必要なのか、そのような質問が多くありましたが、スポーツ賭博や闇カジノというのは、単なる表面上に浮上してきた現象であり、根本的な問題はもっと奥の根っこにあります。

日本ではスポーツで活躍したければ、早い時期から子供にスポーツ優先の生活をさせる傾向にありました。元日から練習をするというアスリートも珍しくないかもしれません。当然学校の授業もそっちのけ、スポーツ偏重の人生にどっぷりつかっている方もいます。大学で授業をしていると、スポーツ推薦で入学してくる学生には、大学で学ぶ基礎学力が整っていないケースも少なくありません。もちろんテストの点数がよければいいというのではなく、徳育や倫理観を養って、幅広い教養を身につけることが重要になります。それが社会で生きていく上で、人生を豊かにする術となります。スポーツ一筋の人生では、正しい教養を身につけるための、教育や社会との関わりを持つ、様々な機会を失うことにつながるのです。

近年スポーツ偏重を見直し、文武両道を唱える日本の大学も出始めましたが、“スポーツで成功したければ、他の事を犠牲にするくらいでないとイケない！”と、スポーツ偏重の人生を歩むことが、スポーツの成功に結び付く！という考えも、日本ではまだまだ根深く残っています。

以前日本の政治家が“2番じゃあだめなんですか？”と発言をされたことがありました。アスリートなら当然答えは“No.2 is not an option!” 目指すは頂点のはずです。私もスポーツの指導者のはしくれですので、スポーツの大前提“勝つことを目指す！”の原理原則は大事にしています。しかしその頂点に立つのはたった一人だけです。スポーツでの成功、例えばオリンピックなら、一つの種目で原則金メダリストは世界で一人（もしくは1チーム）です。高校野球も甲子園で優勝するのは1チームです。プロ選手として活躍できる、収入も安定するというアスリートはごく一部です。多くのアスリートは日の目も見ずに競技人生を終えるのです。その時“私はこのスポーツのことしかわからない、これからどうして生きていけばいいのか？”という人生をアスリートに歩ませていいのでしょうか。

アスリートはうまくなるために、勝つために一生懸命努力し、指導者はそのために知恵を絞り指導をします。しかし無制限にアスリートの人生を犠牲にすることは、結果的にアスリートの人生を不幸に追いやるリスクが高まります。スポーツのスコアボードだけでなく、人生のスコアボードにも責任を持って指導することが、真の指導者の役割です。（つづく）

* 吉田良治さんBlog
<http://ameblo.jp/outside-the-box/>